令和７年度第４回　感染症発生動向調査協議会

令和７年７月１６日

月番：川本委員

１　前月の感染症発生動向について（2025 年第 23 週～26 週・6 月）

＜全数把握対象疾患＞

・結核は今月も発生しており、年齢別では高齢者に結核が、若年成人に潜在性結核が多くみられた。

・侵襲性肺炎球菌感染症は今月も中年～高齢者にみられた。第 23 週～26 週に合計 4 名発生しており、このペースで発生すれば 52 週間での発生は例年より多い傾向があることから、今後の動向を注視する必要がある。（ただし 1、4、5 月に多く、7～9 月に少ない傾向が指摘されており、今回の期間は 6 月上旬から下旬の動向であり、このあと減少してくるものとみられる）

・腸管出血性大腸菌感染症は引き続き発生が続いている。

・日本紅斑熱の発生が 26 週にみられた。（他地域でも発生して報道等されており、県内の発生についても注視していく必要がある）

・レジオネラ症は前年・前々年と比べても多く発生している。

(STI)

・梅毒は 20～60 歳代の男性に多く発生し、若年成人女性にもみられた。23 週から 26 週は 4 週間で男性に 11 人発生しており、昨年 1 年間の発生のペースより多い印象があり、動向を注視する必要がある。男性のうち 6 か月以内の風俗利用歴のある者は 2024 年の 47.4%、2023 年の 48.5%と比べて、今年のこれまでのまとめとして 38.5%であり、やや少ない傾向があるように思われた。一方で女性のうち 6 か月以内の風俗従事歴のある者は、2024 年の 20.0%と比べて今年のこれまでのまとめは 31.0%であり高い傾向があるように見受けられるが、その前の 2023 年が 27.3%でありばらつきの範囲にとどまるのか、今後注視が必要であると考えられた。

・後天性免疫不全症候群は若年成人で男性に多く発生しており、昨年 1 年間には女性の発生がなかったが、今回は女性の無症候性キャリアの発生もある。ただ、23～26 週での発生はみられなかった。

＜定点把握対象疾患＞

・百日咳については、今年ここ数年にない発生をしており、特に 10～14 歳の小児に多い傾向がある。この傾向は他地域から出ている報告でも同様である。第 23 週～26 週の期間においては、10～14 歳がもっとも多いものの、5～9 歳にも多く発生しており、動向を注視していく必要がある。

・インフルエンザ・新型コロナウイルス感染症については、この時期には発生が少なかった。

・RS ウイルス感染症は数年前に夏に流行した時期もあったが、現状では発生が少なくなってきている。

・感染性腸炎が今年は春以降、例年より多い印象があったが、やや低下してきている。

・例年は手足口病やヘルパンギーナが流行しはじめる時期であるが、今年はまだ増えてきていない印象である。

２　検討すべき課題

・現在の資料にはないが百日咳が中学生より小学生に主な感染者が以降してきているように見受けられるが、中学生の感染が収束したと考えるべきか小学生にも広がりはじめたと考えるべきか分析が必要。

〈事務局から〉「岐阜県インフルエンザ注意報及び警報発表要領」の改正案について

３　情報提供（月番委員専門分野から）

・(以下引用)「日本小児科学会が推奨する予防接種スケジュール」7)では、任意接種となるが、就学前に 3 種混合ワクチンを、また現在 11～12 歳の定期接種となっている 2 種混合ワクチンの代わりに 3 種混合ワクチンの接種を推奨している。(中略)　百日咳の流行を抑制するためには定期接種への追加の検討が望まれる。(百日咳患者数の増加およびマクロライド耐性株の分離頻度増加について 日本小児科学会 予防接種・感染症対策委員会 2025 年 3 月 29 日より引用：https://www.jpeds.or.jp/uploads/files/20250402_hyakunitizeki1.pdf)

＜検討結果＞